

「地域で減災！あなたが力 みんなが力」

(財)市民防災研究所

理事 池上 三喜子

I 防災ビデオ「地域で減災！」が視聴者に伝えたいこと

災害被害を軽減する「自助」「共助」

大地震や風水害などの自然現象は、人間の力ではくい止めることはできませんが、災害による被害は、私たちの日頃の努力によって減らすことができます。自分の身は自分で守る「自助」、地域や身近にいる人どうしが助け合う「共助」こそが、災害による被害を少なくするための大きな力となります。ただし、身のまわりの人を助けるには、まず自分自身が無事でなければなりません。平時から、「自分でできること」、「家族でできること」、「ご近所と力を合せてできること」などについて考え、いつくるかわからない災害に備えておくことが大切です。

『減災』とは災害後の対応よりも事前の対応を重視し、できることから計画的に取り組んで、少しでも被害の軽減をはかるようにすることです。災害が起きた時、地域を守れるかどうかは日頃の備えと隣近所の助け合いにかかっているとと言えます。まず、自分の身を守り、家族の安否確認、そして地域全体の安全を確認するなど、緊急事態だからこそ発揮できる「防災力」を、みんなで培っておきましょう。

市民の基本的な役割

- ① 家屋の安全確認、補強
地震：家や塀の耐震化、家具類の転倒・落下の防止、ガラス類の飛散防止など
風水害：屋根、看板、雨どい、側溝、樹木などの安全確認
- ② 火気器具の点検・管理
ストーブなどの点検、火気使用場所の不燃化、可燃物の管理
- ③ 消火器、消火用水の準備
風呂の水をためておく
- ④ 非常用飲料水、食料の準備
1人1日分の水 = 約3リットル
- ⑤ 救急医療品の準備
ラテックスグローブ、ウェットタオル、アルミック救急シート、滅菌ガーゼ、薬品、包帯、サージカルテープ、綿棒、ピンセット、ハサミ、救急絆創膏、三角巾など
- ⑥ 生活必需品の準備
下着、毛布、タオル、ちり紙、使い捨てカイロ、カセットコンロ、ビニール袋など
- ⑦ 防災用品の準備
ラジオ、懐中電灯、ビニールシート、かなづち、ノコギリ、ジャッキ、ロープなど
- ⑧ 防災講習会、訓練への参加
地域で行う訓練に参加する
- ⑨ 家族で防災会議
災害発生時のためにそれぞれの役割を決めておく
安否確認の方法(災害用伝言ダイヤル 171、携帯災害用伝言板など)を決めておく
- ⑩ 避難所の確認
近所にある避難場所、避難所等を確認しておく
- ⑪ 自主防災組織への参加

II 内閣府「一日前プロジェクト」から伝わる住民の意識

・ 最初はみんな「お殿様かお姫様」の避難所

避難所に来た皆さんは、最初はお殿様かお姫様みたいに、じっと座っているだけなんですよ。私たち小学校区の役員が対応に追われているときも。同じ被災者なのにね。

そこで、「元気な人は一緒におにぎりを握ってください」、「お米を研ぐのを手伝ってください」とお願いしたら、若い人もお年寄りも我に返ったように、「それなら」と気持ちよく炊き出しの手伝いをしてくれました。あれから、避難所にいる人たちの気持ちがひとつになったような気がします。だから、避難されてきた方々をお客様みたいにさせない方策、例えば必要な役割ごとにあらかじめチームを作っておいて、どこに何人配置するかを決めておく。避難者にも作業をお願いするということも考えておくことが必要なんじゃないかと思います。

・ 避難所のリーダーさんは中学生(校庭キャンプの経験生かす)

学校に行ったら、子供たちが率先してハンゴウを出したり、畳を干したりしていました。大人の方も手伝っていましたが、確か、その春に卒業したばかりの子供たちが中心になっていたと思います。最初の3日間ぐらいは、畳とかマットを敷いて、小学校の講堂に避難してきた人たちを寝かせたのですが、子ども会で年に1回、校庭でキャンプをしているので、講堂のどこに何がしまっているのか、子供達は全部知っているんですね。避難所になっている小学校の隣は消防署でしょう。寒いからと言って消防署の方も一緒にたき火をしようということになりました。子供達は校庭キャンプでバーベキューをした経験があるから、ドラム缶で火をたこう、お湯を沸かそう、という時に自然にできたのです。

・ 災害でわかるコミュニティのありがたさ(地元記者の視点)

私は記者ですが、地元の記者としては、島の人たちが生活を再構築していく姿を記事で追っていくことにしました。コミュニティがしっかりしているということが、防災面で非常に大きな意味を持つということ、都市の住民に知らせていく意味があると思ったからです。あれほど壊れたのに、なぜケガ人が少なかったのか、なぜ火事が少なかったのかという視点に立つと、やっぱりコミュニティがしっかりしていたからといえます。だから、中学生やお年寄りがいろいろ活躍したこと、コミュニティの中でその役割をひとりひとりがやった、それぞれに役割があったということを記事にしました。それと都市防災。マンションの中の壁に亀裂が入ったり、中が壊れていても、外から見ただけではわからないわけです。それが、たまたまうちの社員が1人住んでいて、中に住んでいる方々が大変なことになっているという話がわかってきたので、都市部の話をもう1つの柱にしました。

・ 地震のショックで思考停止(声出す人がリーダーシップ)

自衛隊のヘリが来るまでは、みんなで廃校になった小学校のグラウンドに避難したんですけど、やっぱりショックが大きくて、そこに行くにも誰かが先導しないと動けないという状態でした。声を出す人が2人くらいいないと絶対動けないんですね。何をどう考えていいかわからないという感じ。だから、自分と友達2人で、いったん村を捨てようという決断を皆にさせようと相談してから、「ここで寝てくれ」とか指示すると、全員いい子になってついてくるんです。人の思考回路というものがなくなってしまったかのように。「それは結構怖いことだな」、「もし自分たちの判断が間違っていたらとんでもない方向にいったかもしれないな」と、後で友達と話をしました。その後3日目くらいからやっと個々に文句を言うようになってきました。

「これは意識が戻ってきたね」と。自分たちもしっかりしていたつもりなんだけど、相当変にはなっていたと思うんです。5日目ぐらいになると皆さん自分の意思表示ができるようになったというか、「おまえらみたいなのに指図される筋合いはない」という声がいっぱい出てきて、これはもう大丈夫だということで、村の区長さんたちにバトンタッチしました。

- ・ **朝食を一緒に配りませんか？(被災者も立派な働き手)**

地震で被災した地域の小学校のテントでずっと寝泊りをしていました。固いおにぎりじゃ、とてもジーちゃん、バーちゃんは喰えないぞという話になって、おかゆだけは乳幼児の離乳食にも使えるからと、24時間切らさないようにしていました。で、朝ご飯を食べさせようとすると、一般ボランティアはまだ来てくれないから、人の手が足りない。われわれ2~3人で1,000食とかを配りきれものじゃない。考えたら、「いるじゃないか、体育館の中にぶらぶらマンガを読んでヒマそうにしている連中が！」となって、館内放送をしてもらったら、10人ぐらいがわーっと来て手伝ってくれたんです。けれど、翌日から1人減り、2人減り、3人減りという具合。「どうせ、そんなことをしなくて飯を食わしてもらえ」という考え方が浸透してきたんですね。「冗談じゃないぞ」ということになって、行政のほうからも声をかけてもらったら、入れかわり違う人を連れてきてくれるようになり、今度はそこから派生して、どんどん人が増えてゆきました。ボランティアって、なぜか避難所のなかって足を踏み入れにくいんですよ。生活の場、プライベートの場ですから。外部の我々はなるべく入りたくないし、入っちゃいけないと思うので、そこに避難している人に、炊き出しを取りに来られないお年寄りへおかゆを持って行ってもらいたいのです。そうすれば、お年寄りがいつもと違う様子だったら、すぐに気づくはずですから。

- ・ **非常持出袋より避難が優先**

緊急用の持出袋を用意しなさいってよく言われるけど、私は特別なものは必要ないと思いますよ。今回は食料はすぐに届いたし、外に出ればコンビニがあっちこちにあって、飲み水もある。それを捜す手間があるんだったら、とっとと逃げてほしいと思います。避難するのが第一です。なぜなら、中越地震の時に、その袋を取りに戻った方が、直後の余震で亡くなられたとも聞いています。そのときにさっと持っていけるものだけ持って逃げればいいんです。私たちが逃げるときは、余計なものは持っていきませんでした。今回の水害でも、結構みんな、現金とか通帳とかを持って逃げているんですよ。でも、通帳やキャッシュカードがなくても、身分証明さえしっかりしていれば、金融機関は全部やってくれましたからね。ただ、災害泥棒みたいなのがいるから、家をあんまり空けたくないという気持ちがあって、逃げるのをためらっちゃう気持ちもわかります。留守宅の見回りとかを組織的に実施できるようになればいいなと思います。

- ・ **普段からの声かけが災害時に生きる**

自分は今、民生委員をさせていただいているんですが、市のほうからいろいろな指示が来たときに、「いや、おら、そんなと嫌だから行かねえ」って言うお年寄りもいますよね。そうじゃなくて「あんたの言うことだったら聞かから、おれも一緒に連れて行ってくれ」というような、信頼関係をつくっておくことが大切だと思います。洪水で本当に水がどんどん追いかけくる場合は、年寄りを置いて、自分が先に逃げるかもしれませんけれども、まず、地域のお年寄りの人たちに、安心して町内に住んでもらって、みんな助け合っているんだというこ

とをわかってもらえれば、「頼むね」「うん、任せてね」という、そういう信頼関係ができると思います。普段からお宅を訪問して健康状態を聞いたり、心配事はないかとかいう話をしておいて、自治会長さんとうまく連絡をとりあって、一緒に避難するという約束ごとを作っておけば、みんな一緒に逃げられるって思いました。

Ⅲ 内閣府「一日前プロジェクト」から伝わる行政職員の意識

・ 中学生の「防災学」

地震の被害があった後、耐震診断の授業を受けた子供たちが先生となって地域で講習会をやったんです。参加するおじいちゃん、おばあちゃん世代の人も、孫世代から言われると身にしみることか、耐震の大切さを実感されたようです。地場産品を販売する産業祭の中でも、中学生の子供たちが一つのテントを持って、模型やパネルを置いて、お客さんたちに耐震の大切さというのを一生懸命アピールしていました。これをきっかけに、地元の中学校で「松島防災学」が始まりました。図上訓練をやってみたところ、いろんな意見が出て時間が足りませんでした。来年は図上訓練だけを、半日ぐらいかけてやろうかなと思っています。これから大人になる中学生たちに防災の正しい知識を身につけてもらうことは、とても大切なことだと思います。

・ イベントよりも実践訓練

地元の防災の日に合わせて、市内全域の自主防災会に、避難訓練などをしていただいておりますが、そのときには、職員全員を各地区に派遣します。職員には、自主防災会が立ち上がったかどうかの確認と、何人集まって、どのような行動をしたのかという報告をしてもらい、あわせて自主防災会の会長さんからも報告をいただきます。われわれ行政としても、自主防災会からの情報がありがたいんです。情報を把握できれば、その対応をどうするかというのは本部でできますから。しかし、行政がすぐに行くと言ったって、道路が壊れていて行けない場合もありますから、その間、何とか自主防災会の皆さんで救助なり、声を掛け合って安否確認をしていただくというのが一番大切だと思っております。以前は学校とかどこか1カ所に集まって、大型ヘリコプターを飛ばしたりして防災訓練をしました。でも、そのようなイベント的なものより、実践的な防災訓練のほうが効果的だと思っております。今は市民を主体にした防災訓練の方向でやっています。

・ 「震度5弱で全員集合」とは言うけれど

最初の地震が起きた時、私は仙台におりまして、市から電話で、松島が大変で呼び出しが来ているぞということで、急いで仙台から戻り、役場のほうに駆けつけました。仙台ではそんなにたいした地震ではなかったものですから、たいしたことはないだろうと思っていましたが、松島に着いたら、役場の中は大変な状態になっていて、職員や消防団、消防署の職員の皆さんとかは既に集合していました。幸い道路が寸断されたわけではなかったので、町内にいた人たちは、集まりやすかったと思います。しかし、役場の職員の召集は、震度5弱で全員集合ということですが、同じ松島の中でも揺れが場所によって全く違う状態でしたから、どこまで出勤させたらいいのか悩むところもありました。家族や自分が命にかかわるようなケガをしていたら、出てこいといったって難しいですよ。

- ・ **役場の職員にもケアが必要**

しばらくの間、役場の人間には、皆さんの大変だ、困った、どうしようかという話をずっと聞かなければならないんです。何にしても対応をすぐ迫られたり、いろいろな苦情とかを聞いている職員は、大変な思いをしていましたね。通常の自分の仕事のほかに罹災証明の発行とか家屋調査とかでバタバタしていて、とても休める状態じゃなく、みんなかなり無理していたと思います。災害対応は1日2日じゃなく長期にわたったので、疲労はたまる一方でした。災害対応は長丁場なので、町民だけじゃなくて、職員のケアもしなきゃいけないと思いました。疲労回復の方法について保健師さんが相談にのってくれるとか、そういうことも考えておく必要があると思いました。

- ・ **鳴り続けた電話が停電でパツタリ**

どんどんどんどん雨は降りますし、川の水位が上がってきたのが、役所からも見えました。「ひどいぞ、ひどいぞ」ということで、「川が警戒水位を超えました。水位がいくらになりました」という町内放送が何度も何度も出されました。私は、ずっと民生委員への連絡とかをしていましたが、夜になると、今度は遠方にいらっしゃる市民のご家族の方からも、どんどん市役所に電話が入ってくるようになりまして、「うちのおばあちゃんちに見に行ってください」、「うちの親戚の家はどうなっていますか」というのが、台風の報道やお天気ニュースなんかに合わせて入ってきて、ものすごい状況でした。それが、しばらくしたら役所も停電になり、電話が通じない状況になってしまったのです。外はすごい雨なんですけれども、じゃんじゃんかかっていた電話が急に鳴りやんでしまって、一種異様な静けさになったのを今でも覚えています。

- ・ **ベッドでずぶぬれのおばあちゃん見て気合い入る**

台風もちょっとおさまった夜の10時から12時ぐらいにかけて、福祉の職員2、3人でグループをつくって、特に心配なひとり暮らしのおうちですとか、親戚の方などから連絡のあったところを、長靴を履き、歩いたり自転車に乗ってりして、見回りにでました。私たちが行けた所は役所近くの家だけだったのですが、ある家では、畳の部屋も泥だらけだったので、「長靴のまま邪魔します」と言って、そのまま上がらせてもらいました。すると、雨が家の中に吹き込んでいて、上も下もびっしょり濡れたおばあちゃんがひとり、真っ暗な中、ベッドの上におられました。そのおばあちゃんの姿を見て、私はそれまでも市役所の職員として災害対応に携わってきていましたが、「もっとがんばらなくちゃいけないな」と、スイッチが入ったような感じでした。

- ・ **日頃から携帯電話の充電器を持ち歩く**

隣町の消防から「今、役場が浸水しとるんや！」と電話がかかってきました。あっという間に水があふれてきたので、あわてて書類とかを机の上に上げているところだということです。それに、防災行政無線等の電源も全て1階にあったので、全部ダメになってしまったとも。夜中に、「これが最後の通信になると思います。もう携帯電話の電池がありません」という連絡が入って以降通信が途絶え、その役場は孤立してしまったのです。携帯電話というのは、電源さえ確保できれば、非常に頼りになるものなんですね。あれから、職員はみんな携帯電話の充電器をかばんの中に入れて持ち歩くようになりました。水害を経験して、少しは自分たちの意識も高まってきたのかなという気がします。

- ・ **避難所はすべて一緒ではない**

避難所とひと口で言っても、知り合いや家族が亡くなっている人たちがいる避難所や、家が燃えてしまった人たちがいる避難所もあれば、「まだ安全なんだけれども、もう少し範囲が広がるかもしれないから避難している」という人たちがいるところもあり、さまざまです。私は、市の職員として地区の役員たちと一緒に毎日各避難所を回りながら、いろいろな情報を集め、苦情を聞いて、それを市役所に届けるという仕事をずっとしていたわけですが、避難所によって、温度差というか、その場の雰囲気には大きな違いがあるのを肌で感じました。避難生活が長引く中、火砕流の恐ろしさを知っていたなら、もっと早く避難できたのにと、いう思いが日増しに強くなりました。当時、行政も、市民も、火砕流そのものの知識がなかったし、火山についての正しい情報も得ていなかったのです。

- ・ **誰の言葉信じていいかわからず**

わたしたち市の職員は、一晩中避難所につめて、いろいろなお世話をするという仕事をしていたんですが、「何月何日に大きな噴火があるらしい」というウワサが何回も流れました。科学的に根拠のない話が、あっという間に広まってしまうんですよ。恐怖感や不安感でいっぱいな時ですから、何月何日というように、はっきりした日にちを言われると「じゃあ、注意しなきゃ」となるのだと思います。実際には何も無いわけですが、避難所の方たちは、そのたびに、恐怖におびえていらっやいました。近くにいるわれわれも、どうすることもできませんでした。私も、ある日、報道機関の人から、山が危険な状態だと聞いたのですが、火山に関する知識が全くありませんでしたので、信じていいものかとも迷いました。もっと、正しい情報をみんなで共有できるしくみが必要だったと思います。

- ・ **船頭さんは誰ですか(決めておくべきだった役割)**

役場の中に「災害対策本部」が設置されたら誰が本部長になるというのは、カタチ的には決まっていたんですけども、やっぱりこういう災害になると、いろいろな方面でいろいろな指揮をとる人が出てしまうので、「誰の意見を聞いたらいいの?」という感じでした。船頭さんは一人じゃないと船は進みませんから、誰が船頭さんなのかと。そして誰がこぐのか、誰がその船に乗るのかということなんです。想定されていないことはいっぱいあるし、被害の大きさによって動きは変わるにしても、やっぱり最低限の役割分担を決める必要があったなと思います。その後、そういう反省もあって危機管理課という部署ができたんです。まだ、実際動くときにどうするんだということまでには結びついていないかもしれないけれど、担当部署がはっきりしていれば職員も動きやすいと思います。

IV 大津俊雄さん(神戸市灘区で被災)の教訓

次の災害の形は予測できない。3分間で自らの命を助け、3時間で近所の救助と消火を行い(避難してはいけない。その場で闘うべきである)、3日間は公的救援なしに生き延びる方法を皆で話し合っ編み出してほしい。震災予防の物的投資は十分にすべきであるが、いざ震災となると頼れるのは個人の想像力と創造力だけである。家・生活・コミュニティ・行政に一貫した「しなやかな強さ」が求められている。

V 古市忠夫さん(神戸市長田区で被災)の教訓

地域でよく遊ぶこと、これが災害の時にものをいう。助ける順番があった。

VI 災害時に役立つ人材を把握する

消火活動ができる人(消防団、自衛消防隊、市民防災リーダー等)

救助活動ができる人(消防団、市民防災リーダー、大工等)

医療活動が出来る人(医師、看護師、市民救命士等)

緊急輸送物資を運べる人(トラック運転手、フォークリフト免許所有者等)

災害に強い建物とは、固い地盤の上に建てられた耐水、耐風、耐火、耐震等を配慮した建築である。

(耐震診断・耐震補強、家具類の転倒・落下防止器具の設置、ガラスの飛散防止策、人のつながり等が地震時の減災対策である。)

イベントのマンネリ化を防ぐ六つの「力」⇒ 協力、資力、知力、体力、気力、魅力

(北海道東川町町長 松岡市郎氏談)